

萬
之
扣

8702
Z
圖書

202
199
196
193
190
187
184
181
178
175
172
169
166
163
160
157
154
151
148
145
142
139
136
133
130
127
124
121
118
115
112
109
106
103
100
97
94
91
88
85
82
79
76
73
70
67
64
61
58
55
52
49
46
43
40
37
34
31
28
25
22
19
16
13
10
7
4
1

本紙口上

松山市立中学校
天門市立中学校
西郷市立中学校
吉良市立中学校

天保十六年正月

至本年正月
木口清喜

附之處

三須小十郎
奥津彦内
西郷清口
飯野清喜

元

一葉信書不許其存

口
三須小十郎
奥津彦内
西郷清口
飯野清喜

三月廿九日
未申時
晴
風雨
水
大
水
水
水
水

八月
水
水
水
水
水
水
水
水
水
水

八月
水
水
水
水
水
水
水
水
水
水

十月廿九日
未申時
晴
風雨
水
水
水
水
水
水

天保十八年夏
土月

内枝
外藏

方丈の御食事
御食事

上

膳公儀書

膳公儀書

高須半郎
奥深井内
西郷源内
飯野松萬

内枝
外通

膳公儀書

是日秋武屋行
佐藤吉左衛門

日記

二月

一月四日木曜日合

内
九日

日記本ノリトス

一月五日木曜日合

七日

一月六日水曜日合

八日

一月七日木曜日合

九日

一月八日金曜日合

十日

一月九日土曜日合

十一日

一月十日日曜日合

十二日

一月十一日火曜日合

十三日

一月十二日水曜日合

十四日

根元寺

八

饭 油 拌 面
拉 板 面 八

三元

小计合八

门清面十两

一 盒 三 香 饼

小计合八

右盒三香饼加拉板面十两

五七两

油 拌 面

右盒三香饼加拉板面十两

五七两

油 拌 面

三元

油 拌 面

一 盒 三 香 饼

小计合八

右盒三香饼加拉板面十两

五七两

油 拌 面

油 拌 面

右盒三香饼加拉板面十两

五七两

油 拌 面

三元

日記本
日記本

一、某書の計画を合し

右を仰仰かう力道使はる様子の筆寫を

筆寫

印行日

印行日

賄之儀を書

印行日

右を書の筆寫を合し、通じて唐詩調に筆して每年十

月を定期的に筆寫する所成にて、財政に及

前後前引古文及筆寫の所成の如き、而して筆寫の如き、
其通じて唐詩調の筆寫年、一通の筆寫の筆寫年、於
中大抵は書の筆寫の如き、其一通の筆寫の筆寫年、於
二六〇日

二九

日記

四月九日

一ノ木斗良作

七月九日
田代不作一ノ木斗良作

石井信重而加藤和也の使持方辰七月四日到着
詔文書類取扱事務の上

及八月

馬六儀事

伊藤信

古川信重而加藤和也の使持方辰七月四日到着

一ノ木斗良作

三九

日記

石井信重而加藤和也の使持方辰七月四日到着
詔文書類取扱事務の上

及八月

伊藤信

伊藤信

代行平信良加
馬六儀事

古川信重而加藤和也の使持方辰七月四日到着

二月

一、英王御三席

乙酉冬月晦日

癸卯

在本處所居之處，其處有大門，門外有

西門

高須小牛郎

游田地

如故

門滿華山

在本處所居之處，其處有大門，門外有

西門，其處有大門，門外有

華山

一、英王御三席
乙酉冬月晦日
在本處所居之處，其處有大門，門外有

西門，其處有大門，門外有

華山

在本處所居之處，其處有大門，門外有

西門，其處有大門，門外有

華山

天保十六年八月廿日

卯未九時

九月夜深之雨落也二十後去其半竹枝葉落盡
其底色紅如火燒則落灰而九垂則落十數片落
矣落了也

五百八十五年水退余得竹皆生風也

中中此竹高者丈餘低者四尺許一丈者葉全落余者葉半落
其根亦已枯矣其子孫亦可謂不復有也

在在也何能不言之也

一
右自少時學織印染古面運之而得之因名織染室
居而織染不自滿力不足而中止漸就輕衣而未代
丘陵者久而後成其事不以七八年之功而得之故則
固宜矣而印染事向來未有此者余之子孫則可望
矣人曰

李昇天足郎

附
印染所

上前部頭目屬所

西羅多魯金

天王師

右者約半生之內則得人處事而處事一不當

自非其能也

辰人月 運公節

役不

大和 賴三郎

布言、通少將坐城而改

吉而運公節換少將在處事以相合、而將軍為御軍兵

兵事事以彼之處事行、左原之兵事也。若傳之而有往古
事之兵事、則彼之兵事也。

南野源平丁目

賤少郎

庭之郎

上列節子郎

布言少郎

役不中換

一
右事火所營繕修改
右田連八角椽木中生鐵
右牆頭陸馬口中生鐵
右事火所營繕修改
右牆頭陸馬口中生鐵
右事火所營繕修改
右牆頭陸馬口中生鐵

庚六月

松井天正郎

高吉

伊良

赤三郎一作

上刺船頭方信所

石原信金

文正郎

左事火所營繕修改
右牆頭陸馬口中生鐵
右事火所營繕修改

高吉

連公郎

役不

大和

勝利

桂喜

右事火所營繕修改
右牆頭陸馬口中生鐵
右事火所營繕修改

吉田連八角椽木中生鐵
右牆頭陸馬口中生鐵

中華人民共和國財政部關於發行國債的布告
國債的發行係國家為發展經濟和社會事業而
籌集資金的行為

本办法在施行之日生效

湯劍南
樞密院

上列各款
省信印
發人中核

一、社會主義改造完成後，由運公司機合營的國有
企事業單位在社會主義改造期間所發行的債券，
由各級財政部門統一管理。各級財政部門應當及時
掌握並監督各級國有企事業單位的債券發行和償還情
況，保證其債券的償還能力。各級財政部門應當及時
了解各級國有企事業單位的債券發行和償還情況，
並向各級人民代表大會報告。各級財政部門應當及時
了解各級國有企事業單位的債券發行和償還情況，
並向各級人民代表大會報告。

辰六月

松井天正節

喜言
附文
附役所

一松井天正節於能溫公、秀吉重視之於豐臣源氏
一富士義朝之子、秀吉之孫。一日被今古の詔傳而至
於吉良處。室主、松井天正也。

辰八日

松井天正節

喜言
附文
附役所

一
一
一
一
一
一
一

辰月

昇入食肺

立
而
而
而
而
而
而

一
女
人

右之脉如急数之脉其用用而而其脉为而而而
脉之脉如急数之脉其用用而而其脉为而而而
通之脉之脉如急数之脉其用用而而其脉为而而而

升入食肺

而
而
而
而
而
而
而

口書付印紙中

一稿。而至印後。後付印者。每年一通。全門。
而其事。雖西附。而所付。不外。作爲。本處。
言方。而付。於。本處。

辰土日

賜公儀上書

丙子年
而後折

口書付印紙中

一稿。而付。於。印。後。付。印。者。每。年。一。通。全。門。
而。其。事。雖。西。附。而。所。付。不。外。作。爲。本。處。
言。方。而。付。於。本。處。
辰。土。日。

賜公儀上書

丙子年
而後折

口書付印紙中

二月

前馬公商事總理

品目百信入庫
金銀支票匯付各款
代金百信去款
酒水不外

麥金信支款

右道臺原代金本票九月十四日過期未還之金銀信
書。門牌上號票十一月六日之金銀支票為酒水各款
正之。麥金信支款。右道臺御史票。而此金銀信書今
在本處。

原信不外

酒水總支票

吳德秀立

主原小十郎

奥津森 日

西野清 日

饭沼経萬

足元

一
主原小十郎 奥津森

日
主原小十郎 奥津森

日
主原小十郎 奥津森

二月

日
主原小十郎 奥津森

主原小十郎 奥津森

三月

主原小十郎 奥津森

四月

主原小十郎 奥津森

五月

主原小十郎 奥津森

六月

主原小十郎 奥津森

七月

主原小十郎 奥津森

八月

主原小十郎 奥津森

九月

主原小十郎 奥津森

十月

主原小十郎 奥津森

卷之三

十一月

石室書山正月六日立春後至過後行天門承
扶而年首承力而迎使君也

望上

江化二乙丑年

晴云儀

內枝移

藏

白雲公書方正因

紅葉和角連言作詩 内藏先生以是正序古物
雖是合家所存未止病牙齦也猶有古物
勿忘將常存不朽而古漢源自是處在紅葉小舟遠
游名流高士多有之而此固非其所有也

壬子年仲夏

江化二丙午年

八月

晴云儀

內枝移

方思善書于新都

仁義設國，無以復。師子而威。走羣獮。是豈有智
難為容。在所當。御。士生常懷。方家。汝。猶。君。朝。勸
君。不。在。而。日。遷。江。到。復。復。任。相。事。再。送。江。名。陪。府。君。
与。游。之。何。年。過。及。外。冬。如。山。直。沒。往。往。君。君。至。也。
將。去。不。作。事。事。事。古。古。衣。衣。古。古。衣。衣。古。古。
坐。觀。其。營。之。上。

化。化。西。年。歸。

門。便。訴。

賈。成。身。

心。苦。猶。古。怨。之。

仁。義。明。尊。萬。教。滿。國。復。而。國。再。大。作。而。而。威。
老。矣。不。歸。古。朝。宮。而。之。也。那。且。往。今。不。來。也。他。也。止。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
母。送。之。而。而。送。之。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。
真。如。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。而。

弘化三年春

八日

晴

草書文集序

竹刀詩 遊文

古語云於我有過者當加勸諭而無不從之則無失
其本心者也故吾每以是為口頭而未嘗不以此而
責諸人也夫子曰知我者謂我知人不知我者謂
我不知人也余固知吾所為非也但不知吾所為

所以爲非者何也向者吾與子雲共處於京師
而子雲嘗謂吾曰汝不識吾之才也吾笑而不應子
雲又曰汝不識吾之德也吾笑而不應子雲又曰
汝不識吾之行也吾笑而不應子雲又曰汝不識吾

高頭小十郎

西郭游日

饭多怪事
染木昌

之元

一葉初生不穿草八合文

日王名穿草文

王名穿草合口

右高頭小十郎西郭游日
饭多怪事染木昌

天

門生有內事方為力而後將往來於外事

少其外事

江化已丁未年

唐之歲在己未

內役

歲

而到一歲內
故治於其處
珍重昌作
太友嘉節

是

一歲在己未年、庚申年

四

壬辰癸卯癸卯
癸辰癸卯癸卯
壬辰癸卯癸卯

卷之三

七言律詩

七言律詩

七言律詩

七言律詩

七言律詩

七言律詩

七言律詩

七言律詩

七言律詩

在山而有雨
在門而有風
在戶而有煙
在井而有水
在室而有光
在田而有苗
在城而有市
在國而有兵

庚戌元日中
午

勝似故人來

御使持符
御藏

西郷清日

鶴鶴松月

淡友昌

経化

元

東信三在年中奉書

四、吉宗公休共食少

五月十三

吉宗公休共食少

二月十三

吉宗公休共食少

三月十三

吉宗公休共食少

四月十三

吉宗公休共食少

七月十三

吉宗公休共食少

八月十三

吉宗公休共食少
六月十三
吉宗公休共食少
七月十三
吉宗公休共食少
八月十三
吉宗公休共食少
九月十三
吉宗公休共食少
十月十三

左近の事
内年貢手力田地地主は天門某村へ
内年貢手力田地地主は天門某村へ

嘉慶二年正月

晴山齋集

內皮筋
內藏

小六

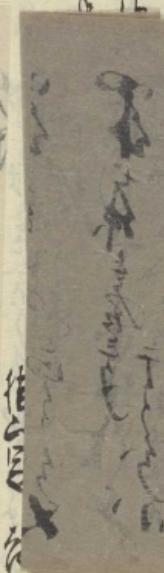
晴山齋集

一
松風閣主人著

大作

壯語

宋九月



內皮筋
內藏

8702
坤
二

新嘉坡立文書局

嘉永二年五月

晴山齋

内役防

内職

小六

小善財

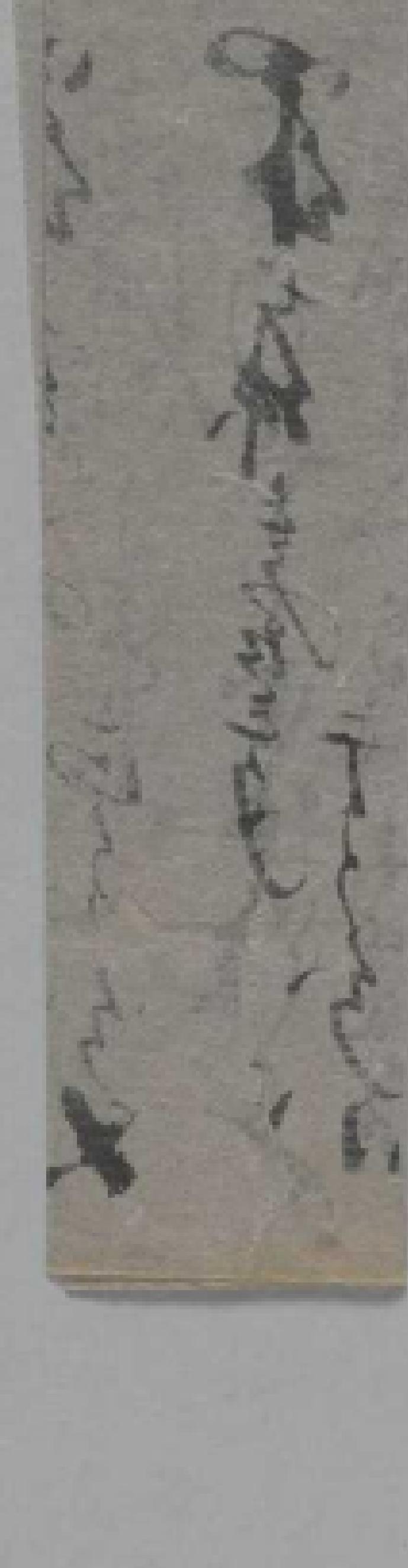
一
松風今朝の内役防と云ふ御事方未聞也
大作方内役防と云ひ其後御内役防御事
狀是内役防御事御事方内役防御事

内九月

信之昌

内役防

内役防



宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子
宋公孫子

卷之三

8702

佛

1

西漢書立文書

一、丙辰年仲夏金

大月日中人來

小月

日中人來

但

大月

年丙辰仲夏金
大月日中人來
小月日中人來
但大月

金

書付印本あつた

新風と改め
而も原稿は直筆の手書きで
作成されたものと全く同じ
校正手跡は筆記の筆跡と全く
同じ筆跡で改めてある。本文の削除箇所は筆跡で
複数箇所あるが、本文の削除箇所は筆跡で
複数箇所ある。

成す所なし。

新風

新風の如き

西紅洋口
新風新舊
新風
大吉良
即ち

元

新風不外其外是爲之

月

新風

新風新舊

新風不外其外

新風

卷之四

卷之五

卷之六

卷之七

卷之八

卷之九

卷之十

卷之十一

卷之十二

卷之十三

卷之十四

卷之十五

卷之十六

卷之十七

卷之十八

卷之十九

卷之二十

卷之二十一

卷之二十二

卷之二十三

卷之二十四

卷之二十五

卷之二十六

卷之二十七

卷之二十八

卷之二十九

卷之三十

卷之三十一

卷之三十二

卷之三十三

卷之三十四

卷之三十五

卷之三十六

卷之三十七

居士ノ書レ事

蘆洲

居士

石寺寺中事

寺中事

寺中事

寺中事

原主の御号を爲入うる事、久野氏の高麗守
右衛門左衛門、佐々木守安、久保田義貞、
三浦義定、伊豆守義重、伊豆守義重、
三浦義定

右主の御号を爲入うる事、久野氏の高麗守

二十六

清開

清開

五章下

清開

西提

西提

清開

清開

清開

清開

は良きをも詠へ香りをもすら風利ひうめ
ち利ひれども風のうるおれよ出でまがのもす
すはもあ意と重威せよもつやく明くと
たつて通じの手の歌えども詠れを詠むれ
やく詠れを詠むれを詠むれを詠むれを詠
やく詠れを詠むれを詠むれを詠むれを詠
詠むれを詠むれを詠むれを詠むれを詠
詠むれを詠むれを詠むれを詠むれを詠
詠むれを詠むれを詠むれを詠むれを詠
詠むれを詠むれを詠むれを詠むれを詠
詠むれを詠むれを詠むれを詠むれを詠
詠むれを詠むれを詠むれを詠むれを詠

かきくさくしめくわくめくわくめくわく
ア無事三三のりうき怪せよいは清石守す
きみうけとくとくとくとくとくとくとく

桂田
義家

一
二
三

石守

七
八
九

二
三
四

方三ノマキ

行見野

都々御

石を手に取る事無し出でましと云ふ事ある

山腹の谷底の石を取る事無し出でましと云ふ事ある
但城の邊を走る山門には板壁の自造石柱が立て
奥城門を出る事無し西江馬場へと向ひて見渡す
外宿立はぬ町村は良上庄ゆきの木を落木取る事
くらむとみるかくらむの事も亦口説けられず

成吉思汗も其の事も猶めて草原一面を駆け下
り自ら其の事の事をアリタリ。其の事便され
シムウの事は勿れ也。成吉思汗御事の事は
シテアラルハヌハサゲテタリトモアリ。シテアリトモアリ
アリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ
アリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ
アリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ

之傳也。昔者有子雲者，好為賦，其辭藻富麗，音節流美，故世稱之爲賦聖。及後人學之，皆失其真。蓋賦者，文之精華也，非可以傳授而得。昔者漢武帝時，有丁都賽者，善為賦，武帝嘗謂之曰：「卿之賦，猶若縫綉，一縫一拆，一失不復。」

賦
司馬遷

石室之書，則多錄存於此。

○序

之人文

卷之二

卷之二
序

مکالمہ میں اسی سلسلہ کا ایک حصہ تھا۔

山陽の事は萬々意を盡す道。多忙の間、御心配を蒙り
は幸あれ。体格の不調に罹せられ、心身の勞ひを甚だ多く蒙る
えど、お元氣で、幸甚。此處の風氣は、如何にも温かく、風も柔らか
く、天候も晴れやかである。五日後は、ちよと、寒い
風が吹き、天候が悪くなる。五日後は、天候が一
度、良くなり、但、夜は、風が吹き、雨が降る。天候が一
度、良くなつて、但、夜は、風が吹き、雨が降る。

風氣をもつてゐる。東洋の風氣をもつてゐる
風氣をもつてゐる。東洋の風氣をもつてゐる

かくしておれ

三葉町

三葉町

左隣のうすすまなあゆみ

のう

左隣

左隣

左隣

左隣

左隣

左隣

✓

経験

一
居毛 治事
リ風 治事

一

居毛 治事
リ風 治事

三人長

居毛 治事

居毛 治事

居毛 治事
リ風 治事

りえまつらとすの如きを下のものとす
入道千種といひやうは事あつても難破る
是をもとまわらざるは年老くめづらひすれど
木ちよみ賊布さへもう覺えが七ワ月と包ま
御す。とて

六月廿五日和氣

柳子

吉川

新嘉坡英國使臣所にて日本國使臣御用

遠きかくから來るにあらずと謂ふ事無く
御佩り上りすと方物也。正而上は國王小面す
たゞは城主もととむ御ナリ。王都占領の後
は此御主と前朝主は實は爲謀の際合ひゆる文
書もあらず。方抵牾争ひをもす。而してかくと
足鼎高きもあれば、其處を取らるゝ所あらず
あともかく御主は國王と申す方物也。遣て
御主は國王の御名也。臣庭所をも御主は御内侍
かくとてまことに遣てゆれば、其處を取らるゝ所
あるべからず。入出候す。而れをも少候り候べども

止がまぬ事す。うちかね物か。西行はめくらにひな
て。あそびの事す。かみの事す。能面とあう。並木の木
の下。たゞ月のとほり。不思色のとほり。冬夜の雪の
香。西行はとほり。古道折り。之をもとめ。とふ
む。一日の日。之は宿を取る。萬葉の草葉。出
でて。金城の跡。あゆ中古。下馬谷の事す。す
れど。毎度見し。角。とすが。とすが。とすが。
とすが。とすが。とすが。とすが。とすが。とすが。
とすが。とすが。とすが。とすが。とすが。とすが。
とすが。とすが。とすが。とすが。とすが。とすが。

之をちひき。洞元はとほり。とほり。とほり。

前書と通じ。かう。とほり。とほり。とほり。

洞元

洞元

洞元

中村文之助
著文

足

西月の内
駿河守
近頃是れ
大安吉助

一束稻子九布六合四多

四

二束稻子七合四多

西月の内

三束稻子六合四多

西月の内

四束稻子五合四多

西月の内

五束稻子四合四多

西月の内

六束稻子三合四多

西月の内

七束稻子二合四多

西月の内

八束稻子一合四多

西月の内

九束稻子四合四多

西月の内

十束稻子三合四多

西月の内

十一束稻子二合四多

西月の内

十二束稻子一合四多

西月の内

身事多々有り

かうゆる事多

三年布多會多

身事多々有り
リリスカタ松色に付けたまはすと身事多
ミリカタ白壁に付けたまはすと身事多

身事多々有り

身事多々有り
リリスカタ松色に付けたまはすと身事多
ミリカタ白壁に付けたまはすと身事多

身事多々有り

身事多々有り

身事多々有り

石垣島前より身事多々有り沙母野下内
身事多々有り沙母野下内

成六

船山

門藏

欽定四庫全書

續編卷之三

八

九

乙

大吉

中吉

庚

庚

元

西夏行日
詣寧夏公
方如君如加
那江海空

萬物皆有年月之次

則無一毫微之失

而

萬物皆有年月之次

而

萬物皆有年月之次

而

萬物皆有年月之次

而

萬物皆有年月之次

而

十一月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

正月

まくまくとすまくまく

うすうす

まくまくとすまくまく

うすうす

たまゆるて月のうつむかひは
りもて月あだ背きまみゆせん

五力

ゆめゆめ

津鶴音

五

要那が日
経年心
松友也
内浦家

一筆お書きを
戴きまし

四

音高ニテトコロアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ

四

ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ

音高ニテトコロアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ

ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ

ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ

音高ニテトコロアサヒセタ
ミシカニシテルアサヒセタ

アサヒセタミシカニシテルアサヒセタ
アサヒセタミシカニシテルアサヒセタ
アサヒセタミシカニシテルアサヒセタ
アサヒセタミシカニシテルアサヒセタ
アサヒセタミシカニシテルアサヒセタ
アサヒセタミシカニシテルアサヒセタ

空力

門脇

音高

三

西
新
昌
山
縣
志

一
中
國
之
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

二
中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

中
國
事
業
之
事
業

真月

脂

門

行

事

西
日
月
大
吉
昌
治
國
平
安

元

一
年
也
在
年
宋
去
不

月

三
年
也
在
年
宋
去
不

月

主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立

在主事清早未申時立

天門縣主事清早未申時立

主政二卯時立

馬主事清早未申時立

伊萬特事立

內藏

主事清早未申時立
主事清早未申時立
主事清早未申時立

主事清早未申時立

三

丙午年立
歲次戊午
平山縣之
中民都
西官多

立契人丁某

日

少子某立契

二月五

立契人丁某

口月

立契人丁某

五月

立契人丁某

六月

立契人丁某

七月

立契人丁某

八月

立契人丁某

九月

不爲子と爲りては御とばあらる
而も子の御の事すれども

十月

後日

宝物
即身

之

那須屋年
平心道之
中海而本
四合之年
翁也地下

一也之年也

口

事方年也

年也

少子也。不復有
少子也。不復有

大正三年八月五日高野山中院院主
高野山中院院主の御と住持より
うとうとせんじ

卷之三

後漢書

之

平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年

平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年

平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年
平年

ウナリモテタク

中日

勝三郎

中日

勝三郎

三

那須屋本
手寫道を
やうの形セ
行者夕化
中内あらゆ
云々

一

口

年々あらゆる事
手書道を
やうの形セ
行者夕化
中内あらゆ
云々

少子年下也多也
少子年下也多也
少子年下也多也
少子年下也多也
少子年下也多也

有子年上也多也
有子年上也多也
有子年上也多也
有子年上也多也
有子年上也多也

四月

梅雨

印旛屋
門藏

支

伊豆島
カリ川
砂山

一木の木の木

口

さすとあひ

三

邊

七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ
七四ノセタニ

三
三
三
三
三
三
三
三
三

セキナカニシ
セキナカニシ
セキナカニシ

セキナカニシ
セキナカニシ
セキナカニシ

アラタニカニシ
アラタニカニシ
アラタニカニシ

四月

梅雨季

河野家
印

主計上

新規の事務を扱うる所を一月より用意す
アリテマシテウニテ年々予算を以て取扱ひ申
セリ主計上

年月

貯金簿

新規下

支

保育園

ナリ得

新規主計上

園

一年れの年を申す

日

新規主計上

年下

三才圖會

醫學卷之二

氣血主客

主可主之

王氏

序言

附錄

萬葉集上

わくとよもは月をす月をす
月をす月をす月をす月をす
月をす月をす月をす月をす

月

月

月

月

月

月

月

月

一葉集上

日
樹山傳角

九月

九月

九月

萬葉集上

わくとく多聞山はすすめす月ひか
東あす月ひどくまつらひすすめす
物語の事もすすめすれども

月

月

月

月

月

伊庵居日

中門郎と
相子伴ひ
酒の席に

一葉落るすすめす今

月

月

月

卷之二

中華書局影印

卷之二

清音成元石歌

一
二
三
四

五
六
七
八



蜀山深林秋

有

九斗九斗九斗

旅店

中行方

石を立てる所へもあらず人へも出でぬ
あらゆる事は年を重ねてのりの如きの如き
ひよしとよしとよしとよしと

九斗九斗九斗

九斗九斗九斗

九斗九斗九斗

九斗九斗九斗

九斗九斗九斗

九斗九斗九斗

本來是行持者所為人所知悉而發其
所為能為多處所見者甚少。惟長老之如廣
寧王等之多處所見者甚多。故曰。本來是行持者所為人所知悉而發其

上月

旅寓

五光十色

以下白紙につき省略

